

日本人の英語はなぜ間違うのか？

第1章

英語教科書が抱える問題 7

学生たちに謝りたい／間違いだらけの『かわいそうな ぞう』／
あり得ない英語が掲載されている教科書

第2章

時制が足りない日本人の英語 17

一部の時制しか教えられない中学英語／「現在進行形」を使うという罪深さ／
教科書にある“ヘンな英文”／気が変わってなければ「現在完了形」／
中学2年までは、「現在完了形」が禁止!?!／あり得ない英語表現が教科書に登場／
「村上春樹の紹介文」に見る時制の問題／「鳥獣戯画」に興味を持ったのはいつか?／
東京競馬場が汚いと思ったのはいつか?／
「過去完了形」を「過去形」で代用できるか?／「過去完了形」は中学で教えるべき

第3章

冠詞 the と数への無関心 37

必要のないtheの存在／「すべて」を表すtheが果たす役割／
教科書に見られる間違ったtheの用法／添削すると見える数々の問題点／
複数を単数にしてしまう教科書

第4章

基本動詞・助動詞を使いこなす 47

家族の数を英語で言うには?／seeとwatchの意味の違い／
getの用法に対する大きな誤解／be going toとwillを使い分ける／
must=have toではない!?!／混乱する「義務」「命令」「必要性」

第5章

仮定法の基本を理解する 63

教科書にのしかかる制約／仮定法なしでは英語にはならない／
仮定法は英語の基本／仮定法禁止の中2教科書／
茅ヶ崎に住む理由は仮定法で／couldはcanの過去にあらず／
wouldn'tとwon'tの大きな違い／仮定法を使わない人生の選択／
相撲について説明をするか、しないか?／丁寧な感情を表す仮定法

第6章

人気者“so”の用法に関する誤解 89

日本人はsoが大好き／soを使うほどの因果関係があるのか？／
教科書に見られるsoの多用／soが含まれた多くの「残念な」英文／
なかなか直らないsoの多用／veryの代用ではないso

第7章

itとthatを使い分ける 109

itとthatの微妙な使い分け／「それ」と言えば、itしか使えない／
itでもthatでもなくthisの場合

第8章

単語の無意味な「繰り返し」を防ぐには？ 117

読み手をいらさらさせる「繰り返し」／名詞の繰り返しをいかに避けるか？／
「代名詞を使えない」現象／教科書に見られる“繰り返し問題”／
「Mr. Steven Jobs」がおかしいわけ／“要らない語”は省こう！

第9章

「論理の飛躍」が多すぎる 131

一読では理解不能な英文／論理が遠くまで飛んでいく!？／
例も理由も存在しない英文／感動できない英語の論理／
逆になってしまう“因果関係”／「全人類」に向けた英語？／
『かわいそうな ぞう』の非論理性／救いようのない英文／『かわいそうな ぞう』のウソ

第10章

自然な英語を書くために 149

「私たち」とは誰のこと？／「因果関係」がおかしい英文／
英語としてあり得ない奇妙な相づち／必要のないreallyと正しくないright／
someを削除して自然な英語に／Do you know ...?を多用する日本人／
日本語のレトリックを使えるか？

あとがき 172 / 引用文献 174

早いもので、私が現在勤めている大学の専任教員になって、28年が経ちました。時々「今の学生の英語力はどうですか？昔と違いますか？」というような質問を受けることがあります。そんなときに私はたいてい、「一概には言えませんが、二十数年前に比べたら、間違いなく、発音と聞き取りは幾分かよくなっています。その代わり、読解力がずいぶん落ちているという傾向があります。ただし、一般の大学生の1割くらいは、自分から進んで真面目に学習し、4年間で着実に上達します。その割合に昔と現在とで変わりはありません」というように答えます。

本書では、日本の大学生が書いてしまいがちな英文と、日本の中学校で使われている英語の教科書に共通して見られる典型的な特徴と問題点を取り上げ、その修正方法について考えてみました。書き進めながら、指摘が少し厳しすぎるかな、と感じることもありましたが、「自然な英語を書くために、これくらいは覚えておいてほしい」というポイントを押さえたつもりです。

ただ、教育現場の実態を考えると「この程度の問題があっても仕方がないだろう」と思われる部分もあります。まず、

学生のほうは、それまでの英語教育であまり鍛えられていないわけですから、大学に入ってからいきなり、伝えたい意味が正確に通じるような英文が書けるはずがありません。一方、教科書のほうですが、日本で“中学レベル”とされている水準に合わせて英語の教科書を作ることは、きわめて難しい作業です。限られた文法と語彙で自然な英文を作るには、相当の工夫が要るのです。現在の日本のように国民全員に1つの外国語を覚えさせようとする、そのくらいの問題が生まれてくるのは当然といえは当然のことでしょう。もしアメリカの全国民に日本語を覚えさせようとするれば、これより大きな問題が生じるだろうということは容易に想像できます。

本書で目指したのは、日本語とは異なる感覚と論理で組み立てられる英語への理解を深めてもらうことです。具体的には、日本語で考えた内容を英文で書き表そうとするときに、起こり得る問題や奇妙な表現を各章で取り上げました。これらを1つ1つ克服していけば、英語での「伝達力」は確実に向上するはずだと思います。

2014年 11月

マーク・ピーターセン

本書は、「知のトレッキング叢書」のための書き下ろしです。

キャラクター(トレックくま)イラスト：フジモトマサル
カバーイラスト：山本(shige)重也
装丁・デザイン：立花久人・福永圭子(デザイントリム)
著者写真：内藤サトル

第1章

英語教科書が 抱える問題

2011年度、小学校で英語の授業が始まりました。
しかし、多くの日本人にとって
本格的な英語学習を始めるときに出会うのは、
依然として中学校の英語教科書でしょう。
もし、その英語教科書に使われている英語が、
不自然かつ誤ったものだったらどうでしょうか？
そんなはずはない、という話ではすまされません。

学生たちに謝りたい

私は大学で受け持っている「英作文」の授業で、最近まで学生たちに申し訳ないことをしていました。

毎回、提出される作文を読むと、みなそろって同じ“ヘンな特徴”を示し、通常の英語には見られないような書き方になっています。私は、各自の“個人指導”のときに、それぞれの文を直しながら、「こんな書き方をいったいどこで習ったんですか？」などと、説教めいたことを言ったりしていましたが、それが間違いでした。学生にとって、そのような対応はフェアなものではなかったのです。何が問題なのか、具体的に説明しましょう。

まず、次に挙げるのは典型的な学生の英文です。

Last year, I bought a bicycle. The bicycle was expensive. But I wanted the bicycle very much. If I work hard at my part time job, I will make a lot of money. So, I worked hard at my part-time job. By the way, I like the bicycles of Italy such as Billato and Bianchi. In the future, I want to try running around Tokyo by the bicycle of Italy.

おそらく、学生がこの文章で伝えたかったのは「去年、私は自転車を買った。高かったが、非常に欲しかったのだ。一生懸命バイトをすれば、たくさんのお金を稼げる（と思った）ので、そうした。ところで、私はビラートやビアンキのようなイタリアの自転車が好き。将来、イタリアの自転車で東京を走ってみたい」といったところでしょう。そこで、私は次のように最小限の添削をし

ました。

Last year, I bought a bicycle. ~~The bicycle~~ It was expensive. ~~But, but~~ I wanted ~~the bicycle~~ it very much. If I ~~work~~ ~~worked~~ hard at my part time job, I ~~will~~ ~~would~~ make a lot of money. ~~So, so~~ I ~~worked hard at my part-time job~~ did that. By the way, I like ~~the bicycles of Italy~~ Italian bicycles, such as Billato and Bianchi. In the future, I want to try ~~running around Tokyo by the bicycle of Italy~~ riding one around Tokyo.

ここでの“ヘンな特徴”は、

- (1) 代名詞を使わず、同じ名詞を繰り返して使う (bicycle, job)
- (2) 過去の話なのに、突然「未来形」が登場する (will make)
- (3) 不適切な動詞を使う (run)
- (4) 定冠詞theを、それに続く名詞に与える意味まで考えないで使う (the bicycles of Italy)
- (5) 日本語の助詞「の」を英語に置き換えるとき、条件反射的に前置詞「of」を使う (bicycles of Italy)
- (6) 1文にまとめても大して長くないのに、複数の短い文に切って書く (2文目と3文目)
- (7) 「したがって」という意味で文頭に置く接続詞Soの後にコンマを打つ (So, I worked hard)
- (8) 文中の「such as ...」の節の前に、コンマを打たない (the

bicycles of Italy such as Billato and Bianchi)

こうした書き方ばかりに出合うと、「たまには本物の英語を読んで、少し勉強してみればいいのに……」と学生の怠慢を責めたくなっていたのですが、ある日、そうした考え方が間違っていることが分かりました。私が以前に書いた本の読者から受けた、定冠詞「the」の用法についての質問が、私の間違いに気づかせてくれたのです。

間違いだらけの『かわいそうな ぞう』

ある中学3年生用の英語教科書には、以下のような英文が載っています。

Many years ago, there were three wonderful elephants at the Ueno Zoo. The elephants were John, Tonky, and Wanly. They could do tricks. Visitors to the zoo loved to see their tricks.

Japan was at war then. Little by little the situation was getting worse. Bombs were dropped on Tokyo every day.

If bombs hit the zoo, dangerous animals will get away and harm the people of Tokyo. So, the Army ordered the zoo to kill all the dangerous animals such as lions, tigers, and bears.^(*1) (下線・太字は引用者。＊は174ページの引用文献参照。以下同)

(大意：ずっと昔、上野動物園には3頭のすばらしい象がいました。象たちは、ジョン、トンキー、ワンリーという名前で、いろいろな芸をするので訪れる人たちにとても人気がありました。日本はそのとき戦争中で、少しずつ状況は悪化していました。東京に毎日爆撃があったのです。もし、爆弾が動物園を直撃すれば、危険な動物たちが逃げ出して、東京に住む人々に危害を加えてしまうと考えた陸軍は、ライオン、虎、熊などといった危険な動物を殺すように命令を出しました)

この英文に関して、以下の指摘と質問を受けました。

- (1) 下線部 the people of Tokyo ですが、限定詞のtheが付くと、「東京の人たち全員」を指すと思います。
- (2) 本文の内容から考えて、ここでは「東京の人たち」という「不特定多数」を指すのであって、「東京の人たち全員」ではないと考えます。
- (3) したがって、ここは「people of Tokyo」と、無冠詞にすべきではないでしょうか。

これについて、私は次のように答えました。

「**the** people of Tokyo」という定冠詞の使い方は、ご指摘の通り、不適切です。また、この短い(たった86語の)抜粋には、それ以外の問題も少なくありません。私なら、下記のように書き直します。

Many years ago, there were three wonderful elephants at the Ueno Zoo. ~~The elephants~~ ① ~~Their names~~ were John, Tonky, and Wanly. They could do tricks. Visitors to the zoo loved to ~~see their tricks~~ ② ~~watch them~~.

Japan was at war then. Little by little the situation was getting worse. Bombs were dropped on Tokyo every day.

If bombs hit the zoo, dangerous animals ~~will get~~ ③ ~~might have got~~ away and ~~harm~~ ④ ~~hurt~~ ⑤ ~~the~~ people ⑥ ~~of Tokyo~~. ⑦ ~~So~~, ⑧ ~~so~~ the Army ordered the zoo to kill all ~~the~~ ⑨ ~~its~~ dangerous animals⑩, such as lions, tigers, and bears.

① elephantsの繰り返しは不自然。

② tricksの繰り返しは不自然。

③ 過去の話なので、未来形のwill get の登場は、文法的にナンセンス。過去形のwould get away and hurt peopleと書いても文法的には問題ないが、空襲の結果として必ずしもそうなるとは限らないので、mightを使うべき。

④ harmよりもhurtのほうが自然。

⑤ ご指摘の通り。

⑥ theをとって、people of Tokyoと直しても、ofの使い方が依然としておかしい。「people of Tokyo = 東京人」のつもりか？ それとも「東京出身者」？ あるいは、たまたまそのときに東京に来ている名古屋人でも「people of Tokyo」になると思っているのか？ 本当はpeople in Tokyoの話のはず。

なお、この文には、当然のことながら、Tokyoという語はそもそも不要。

⑦ どうしてもここで切ってSoで新しい文を始めるのなら、「So,」ではなく、「So」と、コンマ（「,」）無しで書く。

⑧ 切らず、1文にまとめたほうが自然。

⑨ theは間違いではないが、itsのほうが自然。

⑩ コンマが必要。

また、その結果の、

Many years ago, there were three wonderful elephants at the Ueno Zoo. **Their names** were John, Tonky, and Wanly. They could do tricks. Visitors to the zoo loved to **watch them**.

Japan was at war then. Little by little the situation was getting worse. Bombs were dropped on Tokyo every day.

If bombs hit the zoo, dangerous animals **might have got** away and **hurt** people, **so** the Army ordered the zoo to kill all **its** dangerous animals, such as lions, tigers, and bears.

をさらに自然に感じられる文にするなら、

Many years ago, there were three wonderful elephants at the Ueno Zoo: John, Tonky, and Wanly. They could do tricks, **and visitors** to the zoo loved to watch them.

Japan was at war then, **and little** by little the situation

was getting worse. Bombs were dropped on Tokyo every day.

If bombs hit the zoo, dangerous animals might have got away and hurt people, so the Army ordered the zoo to kill all its dangerous animals, such as lions, tigers, and bears.

というふうに磨きをかければよい。

あり得ない英語が掲載されている教科書

しかし、教科書の「たった86語」に、英作文の授業で出合った“ヘンな特徴”がみな見事にそろっていることにびっくりさせられました。問題は「学生の怠慢」ではなく、私の授業の受講生が中学校の教科書で紹介された英語をよく覚えていたことにあったのかもしれません。

なお、「磨かれているかどうか」はともかく、

If bombs hit the zoo, dangerous animals **will** get away... .

のように、英語としてはあり得ない言い方が中学生の教科書で紹介されるということが、なぜ起こるのでしょうか？ ちなみに、この『かわいそうな ぞう』の英訳の出典として教科書に明記されていた *Faithful Elephants* (Yukio Tsuchiya 作／Tomoko Tsuchiya Dykes 訳／Houghton Mifflin Company) に目を通したところ、正しい英語で訳されていました。つまり、教科書に引用する際に「変更」がなされたわけです。

もちろん、この教科書は数多くの規制がある文部科学省の厳しい検定を通過したはずですが、おそらく、その検定では英語の正確さ自体は暗黙の前提となっているため問われず、検定の対象は（たとえば、「多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い、豊かな心情を育てるのに役立つこと」というように英語の正しさではなく内容が対象になっているなど）別にあるので、間違いがそのままチェックされずに残るのだろう、と想像します。

問題は、その前の段階に出版社側で行われたはずのネイティブ・チェック（英語を母語とする人による確認作業）の結果です。そのチェックによる訂正が最終的に無視される、ということも十分にあり得るでしょう。とりわけ、

If bombs hit the zoo, dangerous animals **will** get away... .

のような文は、訂正が無視された可能性がきわめて高いと思われます。というのも、過去の話なので、良心的なネイティブ・チェッカーが目を通していただければ、**will**が**would**（もしくは**might**）と過去形に訂正されるはずですが、その後の編集会議では、「**would**は、まだ紹介されていない『仮定法』となってしまうから、使えない」との勘違いによって、訂正結果の**would**が**will**に戻されてしまったということが十二分にあり得るからです。言うまでもなく、ここでの**would**（または**might**）はただ単に過去形であり、「仮定法」とは関係ありません。もし、仮にこうした過去の話に「仮定法」が登場するとすれば、それは、

If bombs **had** hit the zoo, dangerous animals **would**[**might**]
have got away (もし爆弾が動物園を直撃していたら、危険
な動物たちが逃げてしまっていただろう[いたかもしれない])

という、実際には起きなかったことを「仮に起きたとすれば」と
想定する場合になります。

日本人の英語はなぜ間違うのか？
マーク・ピーターセン 著

発 行：集英社インターナショナル（発売 集英社）
定 価：1,000 円（本体）＋税
発売日：2014 年 11 月 26 日
ISBN：978-4-7976-7258-9

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)